

---

# 滋賀県を中心にした畦畔木の分布と その残存形態 —中間報告—

---

海老沢 秀夫

---

## はじめに

畦畔木は水田のあぜに植えられた樹木である。普通は並木状に連続して植栽されるが、単木の場合もある。

畦畔木の基本的な役割は、イネを掛けて干すための「ハサ木」である（写真1）。その他、用水路の護岸、農作業の合間の緑陰、燃料としての利用など、その役割は多岐にわたっている。近年の認識でいえば、生物の生息地としての役目もはいるだろう。畦畔木はイネを掛けるのに都合がいいように、また水田に陰を作らないように、下枝や一定の高さ以上の枝が定期的に刈り取られる（写真2）。そのため畦畔木の樹形は、箒状になっていることが多い（写真3）。畦畔木の立ち並ぶ風景が一種独特なのは、この樹形の特殊さにもよっている。

中尾佐助は、「人間の意識的保護のもとに生長している植物」のことを栽培植物と呼んだ。畦畔木もこの意味でまさに栽培植物である。しかし、農業のやり方が変わる中で畦畔木に対する「人間の意識的保護」はなくなりつつある。そのため、圃場整備など外部からのきっかけがあれば、畦畔木は簡単に消滅する状態になっている。

## 滋賀県の畦畔木分布

### ① 明治時代の畦畔木分布

滋賀県はかつて、日本でも有数の畦畔木密集地だった。具体的にはどうだったのか。明治時代のデータをもとに分布状況を検討してみた。

明治42年、滋賀県は畦畔木など耕地に日照障害を与える樹木を、44年までの3年間に皆伐すべしという旨の「耕地障害木取締規則」を発令する。この規則の発令に関連して調査された障害木（畦畔木）の本数データとして、明治41年の数字がある（表1）。この数字をもとに当時の畦畔木分布密度を示したのが図1である。

表1 明治41年の滋賀県における障害木（畦畔木）密度

郡市名	障害木本数 <sup>*</sup> (本)	作付面積 <sup>**</sup> (町)	障害木密度 (本/町)
滋賀郡	84,815	4,223.8	20.1
栗太郡	44,723	4,868.3	9.2
野洲郡	102,009	4,713.1	21.6
甲賀郡	31,115	7,433.1	4.2
蒲生郡	526,088	9,856.9	53.4
神崎郡	177,376	3,810.8	46.5
愛知郡	694,187	3,881.5	178.8
犬上郡	269,559	4,522.1	59.6
坂田郡	427,957	5,203.5	82.2
東浅井郡	193,831	3,455.8	56.1
伊香郡	263,659	2,676.5	98.5
高島郡	57,679	6,038.7	9.6
大津市	470	77.6	6.1
計	2,877,246	60,764.8	47.4

\* 滋賀県農業史（大島五郎：1953）より

\*\* 滋賀県市町村沿革史より

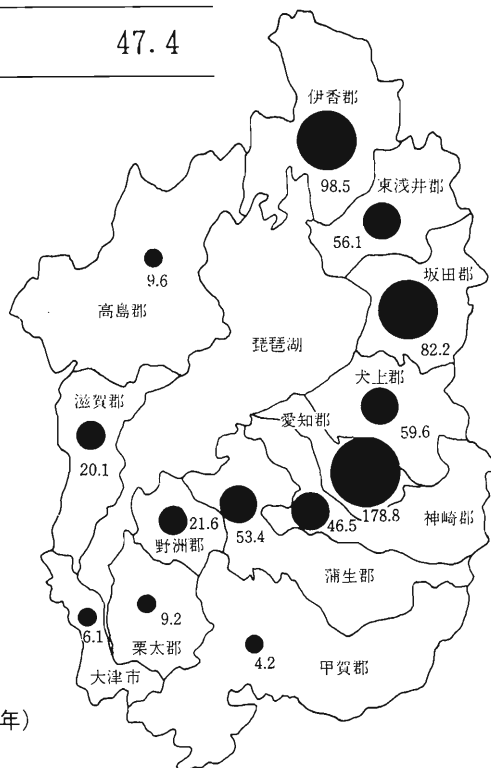


図1 滋賀県における畦畔木の都市別分布密度（明治41年）  
(図中の単位：本/町)

この分布図からすると、当時畦畔木は滋賀県全体に分布していたが、ある程度の密度をもった地域は、蒲生郡以北の湖東部であったことがわかる。中でも愛知郡は分布密度が高く、1 haあたり約180本の畦畔木が植栽されていた。これは、もし樹木が列状に植えられていなければ、これだけで立派な林になり得る密度である。水田の中に畦畔木があるというより、畦畔木の樹林の中に水田が作られている感じである。

明治28年の大日本帝国陸地測量部発行の2万分の1地形図を見ると、当時の畦畔木分布がより具体的にわかる。水田の中に、広葉樹の記号が列状に並んでいるのが畦畔木である。この地形図から畦畔木が特に密集していた地域を読み取ったのが表2で、これは図1で示した結果と傾向が一致している。

表2 畦畔木密度が特に高かった地域  
(明治28年頃)

流域	地域名
余呉川	木之本、高月
姉川	長浜
犬上川	多賀、甲良
愛知川	愛知川、五個荘、湖東、八日市
日野川	近江八幡、竜王

## ② 現在の畦畔木分布

図2は、現在の滋賀県における畦畔木分布の様子を示したものである。これは、1965年9月から66年4月にかけて確認したもので、確認もれの地域があるかもしれない。また、中には長浜市の一部のように確認後に伐採されてしまった地域も含まれている。

図からもわかるように、現在の滋賀県での畦畔木分布はごくわずかな地域に限られてきている。特にまとまったかたちで畦畔木が残っているのは、木之本町(伊香郡)と長浜市の2ヶ所くらいである。

畦畔木が残る条件としては、ひとつは圃場整備がまだおこなわれていないことである。また圃場整備が済んだ地域でも、集落近くに圃場整備事業の対象からはずれる土地があるようで、このような場所に畦畔木が残ることがある。そしてもうひとつ大切な条件として、畦畔木を伐らずにおく、あるいは何らかのかたちで使い続けるという人間の側の意志が必要であることは言うまでもない。

次項では、ケーススタディとして長浜市の例を取りあげる。この地域は調査中に圃場整備の工事が着工され、畦畔木の伐採と追いかけてこをするかたちで調査を進めた場所である(写真4)。

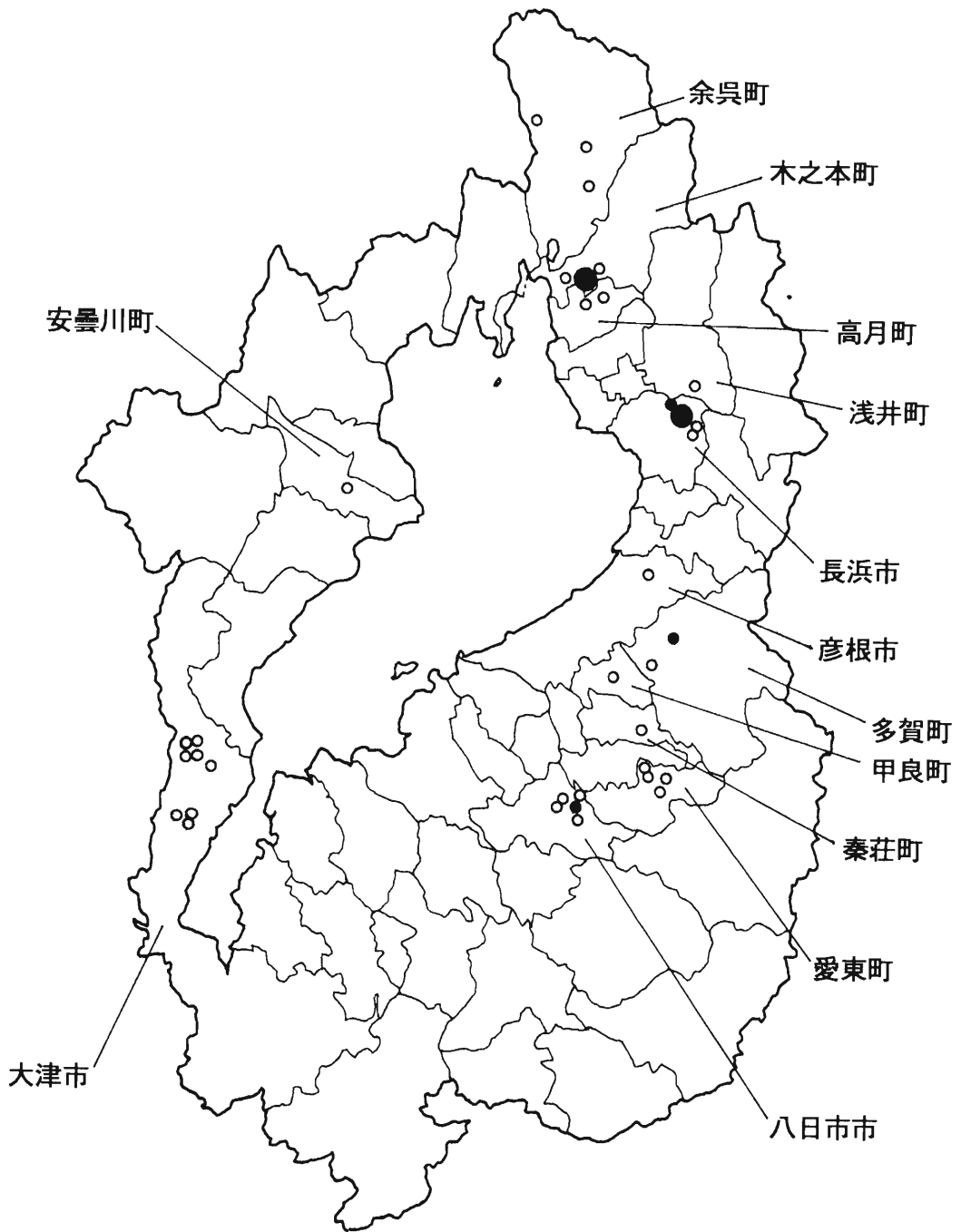


図2 滋賀県における現在の畦畔木分布 (1995年9月~1996年4月調べ)  
 ○分布密度小 (数本が点在)  
 ● 中 (小と大の間)  
 ● 大 (1集落レベルの広さの水田にまとまって存在)

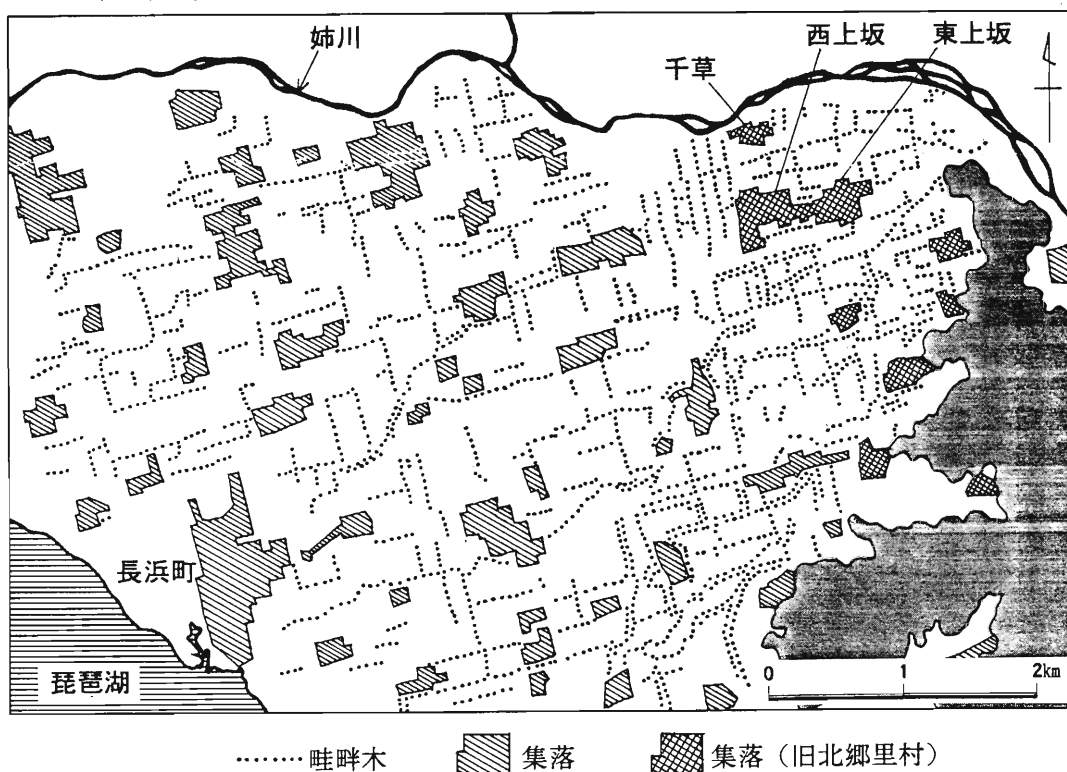
## 長浜市の畦畔木

### ① 二毛作と畦畔木

図3は、現在の長浜市域における、約100年前の畦畔木分布の様子である。このうち、1995年11月の時点でまとまった畦畔木が残っているのは、長浜市西上坂町・東上坂町・千草町など、旧北郷里村（昭和18年に長浜町などと合併して長浜市となる）の一部で、これが今回の調査地でもある。

旧北郷里村というのは、図3のなかでも畦畔木密度がとりわけ高い地区である。そして、この地区の畦畔木の大きな特徴としてあげられるのが、二毛作との深い結びつきである。ここの畦畔木は、イネではなく水田の裏作物、特にナタネを掛けるための畦畔木だったという。

図3 長浜市域一帯における明治28年頃の畦畔木分布  
(明治28年帝国陸地測量部発行の2万分の1地形図より作成)



ところで、長浜市は滋賀県の中でどちらかというと二毛作はあまり盛んなところではなかった（図4）。ところが、旧町村別に二毛作率およびナタネの栽培面積を見ると事情は変わってくる。表3は昭和13年のデータを示したものだが、旧北郷里村だけが飛び抜けて高い数字になっている。今回の調査地を含む旧北郷里村は、どうも長浜市域の中では特殊で、二毛作、とりわけナタネの栽培が盛んな地区だったようである。

図4 滋賀県および長浜市域における二毛作率の推移  
(滋賀県統計書および世界農林業センサスより作成)

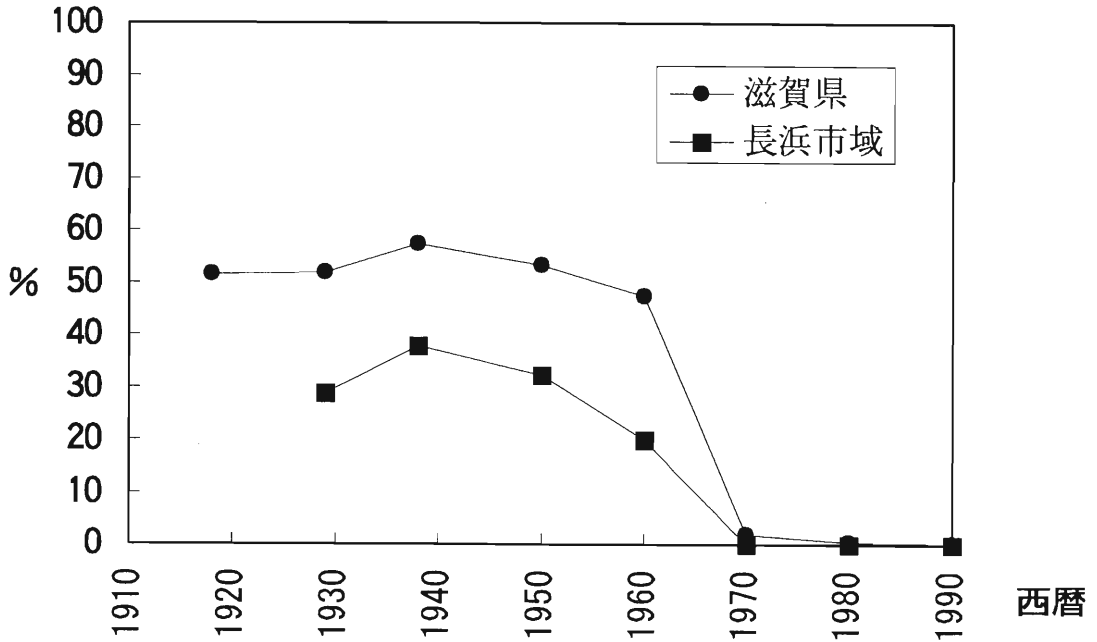


表3 昭和13年の長浜市の旧町村別にみたナタネ・麦の栽培面積と二毛作率 (滋賀県統計書、昭和13年より作成)

地域		栽培面積 ha		二毛作率 %
		ナタネ	麦	
現在の長 浜市を構 成する旧 町村	西黒田村	3.4	7.2	8.1
	六 荘 村	16.3	7.8	32.2
	南郷里村	28.5	15.0	40.4
	北郷里村	119.5	9.0	98.9
	神 照 村	40.6	25.4	24.7
	長 浜 町	1.0	0.5	13.8
計		209.3	64.9	37.8
滋 賀 県		8,180.3	11,123.8	57.3

## ② クル木

写真5は、稲わらを畦畔木の幹にくくりつけたものである。ナタネもちょうどこんなふうに掛けて乾かした。1本1本の木をハサとして使うため、畦畔木の植栽間隔はそれほど大きくない。

畦畔木の植えられたあぜが広いのもこの地域の特徴である。約2mの幅がある。これはナタネの調製などの作業をするためのもので、このあぜのことを土地の人は「クル」と呼んでいる（写真6）。「クル」はつまり、あぜを意味する「クロ」のことである。

『耕稼春秋』（1707年）という北陸を代表する近世の農書に、「くろ木と、上里にて高畔并大疇に有、針の木、柳、ねぶの木、…」という一節が出てくる。高あぜや大あぜに植えられたハンノキ、ヤナギ、ネムノキが「くろ木」だと言うわけだが、旧北郷里村の畦畔木も、まさに「大あぜ」の「くろ木」である。以下では、この地域の畦畔木を、土地の言い方である「クル」という言葉を使って「クル木」と呼ぶことにしたい。

## ③ ハチカン―ハサを兼ねた果樹

クル木は樹種は多様である。今回調査したのは173の畦畔だが、ここで確認したクル木の総数は約2,800本、樹種は70種類近くに及んだ（表4）。

代表樹種は、カキ、チャンチン、ハンノキ、エノキ、クヌギの5種類。これでクル木総数の8割を占めている。特にカキとチャンチンは本数が多く出現頻度も高い。このふたつが旧北郷里村のクル木といってよいだろう。

このうちカキはもっとも数が多く、全体の3分の1を占めている。ここのカキは「蜂屋」という干し柿用の品種のようだが、土地の人は「ハチカン」と呼んでいる。「つりんぼ」（吊し柿）のための果実生産と、ハサ木の役目を兼ねた実用的なクル木である。

カキはほかのクル木に比べ、今でも比較的管理が行き届いている。ナタネのハサ木として使われることが少なくなってからも、果樹としての利用があったからだろう。圃場整備を前に、カキだけは残そうと掘り起こして移植している人もいた。

## ④ ヤンチン―クル木の基本樹種

幹が通直で強剪定に耐え、更新も容易なチャンチン（写真7）は、地元では「ヤンチン」と呼ばれ、おそらくナタネのハサ木の最適樹種である。数の上ではカキに及ばないが、この地域におけるクル木の事実上の基本樹種と言ってよい。

チャンチンは中国原産の木である。これがこの辺にいつ頃導入されたのかは不明だが、『耕稼春秋』と同じ北陸の農書である『私家農業談』（1788年）に、次のようなことが書かれている。

表4 滋賀県長浜市東上坂町・西上坂町・千草町一帯のクル木（畦畔木）

樹種	本数	本数%	出現頻度(%)*
カキ	896	31.6	84.4
チャンチン	663	23.4	69.4
ハンノキ	304	10.7	46.2
エノキ	235	8.3	54.3
クヌギ	225	7.9	44.5
チャ	114	4.0	9.8
クワ	108	3.8	26.0
ゴマギ	59	2.1	15.6
クロマツ	26	0.9	5.2
イチヂク	20	0.7	6.9
ヤナギ類	18	0.6	6.9
サクラ類	14	0.5	3.5
クサギ	13	0.5	3.5
クリ	13	0.5	2.9
ケヤキ	12	0.4	4.6
アキニレ	10	0.4	4.0
サンショ	8	0.3	4.0
オニグルミ, ネムノキ	各7	0.2	-
ナラガシワ	6	0.2	-
スギ, グミ類	各5	0.2	-
ウメ, ムクゲ	各4	0.1	-
ヒノキ, アオギリ, トウジュロ, ツバキ, センダン, ニオイヒバ	各3	0.1	-
シラカシ, モモ, イボタノキ, ヤツデ, イチイ, シロダモ, カマツカ, レンギョウ, クマノミズキ, カイヅカイブキ,	各2	0.1	-
マユミ, アカメガシワ, サザンカ, ビワ, ツルマサキ, ウツギ, マテバシイ, カヤ, ニワナナカマド, キリ, ポプラsp, ノイバラ, モチノキ, ヤマモミジ, サツキ, ニシキギ, キーウィフルーツ, トサミズキ, アジサイ, ユズ, ネズミモチ, ナンテン, バラsp.	各1	0.0	-
合計	2,837本		-

\*出現頻度：その樹種が出現した調査単位の割合（全調査単位は173畦畔）



「またちゃんちの木も、架木によく、生長が早く、枝もそれほど多くなく、田畑にかげを作らないので、五代藩主前田綱紀侯のころ、藩命により加賀、越中、能登の三州の農民たちが畔に植えたという…」

チャンチンは、北陸の石川県一帯には前田綱紀の時代（1643～1724年）に畦畔木として入っていた。北陸に近接する滋賀県への導入もこの頃かとも思われるが、確かなことはわからない。

⑤ハン・ヨノギ・ホソーその他のクル木

ハンノキ、エノキ、クヌギを、この地域ではそれぞれ「ハン」「ヨノギ」「ホソ」と呼ぶ。

エノキは太くなるのでハサとしては使いにくい、「土手囲い」、つまり用水路の護岸にはよい木だという。クルのコーナー部分に比較的多かったのもエノキだ。

ハンノキやクヌギは、地域によっては重要な畦畔木樹種だが、当地では2番手3番手の樹種ようだ。これらはハサ木として使う以外に、2年に1度くらいの割合で枝を下ろし、それを「シバ」（燃料）にしたという。

## おわりに—まとめて2年目の課題—

これまでの調査で明らかになったのは以下のような点である。

- ① 滋賀県は、かつては日本でも有数の畦畔木分布県で、特に蒲生郡以北の湖東部に分布が集中していた。このうち、現在でもまとまったかたちで残っているのは2ヶ所程度である。
- ② 圃場整備がおこなわれるとその地域の畦畔木は基本的に消滅するが、集落近くに伐採をまのがれて残される場合がある。
- ③ 畦畔木はイネだけでなくムギやナタネなど水田の裏作物を干すために用いられた。姉川流域の長浜市はその典型例で、この地域の畦畔木は二毛作と深く結びついていた。
- ④ 畦畔木として植栽される樹種は、場所によって特色があるようだ。畦畔木＝ハンノキとされることが多いが、今回取りあげた長浜市の場合は、カキとチャンチンが主要樹種であった。

また、以下のような点を2年目の課題としたい。

- ① 明治時代の地形図を利用して、当時の畦畔木分布を全国規模で把握する。
- ② 日本全国の、畦畔木の現在の分布状況、その土地の畦畔木樹種、畦畔木の呼称などについての情報を収集する。
- ③ 滋賀県内でのケーススタディの追加実施。多賀町、木之本町、滋賀町、八日市市を予定。
- ④ 滋賀県外でのケーススタディの実施。福井県小浜市などを予定。
- ⑤ 写真記録のとりまとめ。写真集の作成などを検討する。

## 参考文献（主なもの）

- 海老沢秀夫. 1982. 畦畔木について（I）—その地理的・歴史的考察—. 森林文化研究第3巻.  
中尾佐助. 栽培植物の世界. 中央公論社. 東京.  
堀尾尚志・岡光夫（校注・執筆）. 1980. 耕稼春秋. 日本農業全集4. 農山漁村文化協会. 東京.  
広瀬久雄・米原寛（校注・執筆）. 1979. 私家農業談. 日本農業全集6. 農山漁村文化協会. 東京.



写真1 「ハサ木」としての畦畔木  
(滋賀県余呉町／1995.9)



写真2 枝の払われた畦畔木  
(滋賀県長浜市／1995.12)



写真3 典型的な畦畔木の樹形。  
写真の老人は圃場整備を前に  
木を切りとろうとしている。  
(滋賀県長浜市／1995.12)



写真4 圃場整備を前に伐採がすすむ畦畔木。  
(滋賀県長浜市／1996.1)



写真5 稲わらを畦畔木にくくりつける。ナタネもこんなふうにして掛けた。  
(滋賀県長浜市／1995.10)

写真6 姉川流域の主要畦畔木＝チャンチン。土地の人はヤンチンと呼ぶ。  
(滋賀県長浜市／1995.12)



写真7 広いあぜ＝「クル」。  
かつてはナタネの調製などの作業場として使われたが、現在は野菜畑などになっている。  
(滋賀県長浜市／1995.12)

